【雑感】一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵書跡にみられる中国古典について

石垣賢一*1

はじめに

一般財団法人沖縄美ら島財団は琉球王国時代の数々の資料を所蔵しているが、琉球王国時代の冊封使や琉球の人によって揮毫された書跡もある。

しかしそれらの人が書いた内容はかならずしもその人の創作ではなく、中国の古典から引用されていることもよく見受けられる。なぜ引用されるのか、理由はいくつかあるが、その当時の中国をはじめ琉球や日本では儒学や中国の古典が学問や修身などでの基本や模範とされ暗誦されたこと、それらの内容や関連文献を熟知していることは当時の知識人にとって教養であったことが大きい。

ちなみに「中国の古典が引用される」ことは、書道愛好家をはじめ研究者の間では「当然の事実」として知られている。しかしあまりにも専門的であること、そして紙面などの関係から図録や展示のパネルでは紹介されることはあまり無いようである。

また面白い事実として、引用し揮毫された書には時折文字や文章の入れ違いがおこることもしばしば見受けられる。それは暗誦が基本的な学習法であったこと、また揮毫する場合、おおよそ贈答のために即興で行われることが多く、何も書籍などを見ないことが原因であると考えられている。

今回、当財団所蔵の書跡からほんの一例ではあるが、中国の古典からの引用と考えられている書跡を紹介する。

①高人鑑書

これは高人鑑という人物が「道光戊戌七月」の時に揮毫した「大富貴亦壽考」という資料である。

高人鑑は中国の銭塘出身で尚育王の冊封副使として琉球に来訪した人物。道光戊戌年（1838）の５月から約６ヶ月間滞在したということがわかっているため、この書の「道光戊戌七月」という言葉から琉球で揮毫されたことがわかっている。そして、この書は龍が描かれた紙に書かれていることから、清朝の紙を使用し、琉球の身分の高い人に贈られたのではないか、と考えられている。

この書の内容である「大富貴亦壽考」は「大いに富み、出世もし、そして長寿にもなります」という意味であり、現在もこの６文字はおめでたい言葉としてよく使用されているが、この言葉は中国の唐という時代にあったという寓話（古典）から生まれている。

中国の宋の時代にその時代までの寓話などを集めた『太平廣記』（**※1**）という書物によれば、唐の時代に郭子儀という人物が織姫に遭遇し長生きと富貴を願ったところ、その織姫が「大富貴亦壽考」といって天にのぼり消え、その後郭子儀の人生はその通り立身出世し長寿であったと記されている。

実際の郭子儀という人物は実在し唐の名将として知られており、彼は大きな邸宅に住み、子孫も多く、長寿でもあったため（**※2**）そのような物語が生まれたと思われる。

資料などの状況からの推測ではあるが、琉球の士族は中国の古典に精通した人も多かったため、この書を賜っ

＊1　一般財団法人沖縄美ら島財団 首里城公園管理部 事業課 調査展示係

た人物は、冊封副使の高人鑑から有名で縁起のいい言葉を頂いたということで大変喜んだのではないだろうか。

②「鄭嘉訓書」1）

つづいて「鄭嘉訓書」を紹介する。

鄭嘉訓は久米村生まれで、１９世紀初期の琉球の代表的な書家である。島津侯にも招聘をうけ藩士の書道指導にもあたったということで、沖縄や鹿児島にも鄭嘉訓の書跡は数多く見られる。

その鄭嘉訓の書のひとつが左の書跡である。

こちらの書は唐の時代の詩人錢起の詩「和王員外雪晴早朝」 **(※3)** が揮毫されている。

この書と錢起の詩を比較し１点違うところを挙げるとすれば、鄭嘉訓の最後の句は「流風誰継漢田郎」となっているところを、実際の錢起の詩では「風流・・・」となっている。これはおそらくは記憶違いでこのようになったのではないかと考えられている

③琉球美人図内「鄭嘉訓書」2）・3）

2）

左2）・3）の書も鄭嘉訓の書である。当財団では「琉球美人」という屏風の一部として収蔵されているが、実際はこの屏風の装丁自体は後世のもので、書と絵画は別々のものであったと考えられている。

そしてこの書跡は少し変わった引用をしていると考えられているのでここに挙げることにした。

「変わった引用」というのは、この2）と3）の書跡はそれぞれの句が違う詩の一節から取られ、それを合わせてひとつの作品となっていると考えられているのである。言葉にすると難しいので実際に見ていきたい。

まず2）「山水清暉遠、文章大雅存。」とあり、鄭嘉訓の名が見える。書き下すとすれば「山水清暉にして遠く、文章大雅にして存す。」とでもなるであろうか。

それぞれの句を見ると「山水清暉遠」という句は唐の詩人王昌齢の詩『武陵田太守席送司馬盧谿』、次の「文章大雅存」は唐の詩人徐凝の詩『送李補闕歸朝』からそれぞれ引用されていると考えられている。 **(※4)**

3）

次の3）には「琴書全雅道、蘭桂起香風。」と揮毫されている。こちらも書き下すとすれば「琴書雅道を全し、蘭桂は香風を起こす。」とでもなるであろうか。

こちらもそれぞれの句を見ると「琴書全雅道」は唐の詩人王昌齢の『静法師東齋』から、「蘭桂起香風」は唐の詩人である楊師道の『賦終南山用風字韻應詔』からそれぞれ引用されていると考えられている。 **(※5)**

この書はそのまま読んでも文章として味わえるものでもあるが、古典の知識がある人であればその引用先のもともとの詩も知っていたはずなのでさらに面白く感じたのではないだろうか。

④「馬執宏書」－１

次に紹介するのは「馬執宏書」という。馬執宏とは首里の士族で、名乗は豊平良全といい、官生（琉球国派遣の留学生）を経て、国学奉行や中城御殿の補修工事責任者などを歴任した人物である。（※6）

その馬執宏が揮毫した書跡は、宋の李邦献の『省心雑言』（※7）というものから引用されている。この引用されている箇所は実際の『省心雑言』とは字が違っていたり抜けていたりしている。（※8）

⑤『馬執宏書』－２

続いても紹介する書跡も「馬執宏書」である。

これは明の時代の末から清の時代の初めの思想家朱用純（※9）の『治家格言』というものが揮毫されている。

しかし、この書の最後を見ると馬執宏はこの書を『紫陽夫子居家要言』としている。

「紫陽夫子」というのは南宋の儒学者朱熹（１２世紀）のことであり、朱柏盧（１７世紀）とは時代が全く違う。『居家要言』も『治家格言』も「家を治める上での大事な言葉」という意味から書名も似ている。実際この『治家格言』は朱熹の家訓であったと認識されていたこともあったようである。

馬執宏がこの資料のタイトルを『紫陽夫子居家要言』としたのは、もしかすると馬執宏がこの文章を暗誦した書籍がそのように記していたからとも考えられる。

そして不思議なことに「要言」という字の下に、小さく「勿」という否定の文字が使われている。上記のように引用した書の題が違うことと「勿」という文字が関係あるのかわからないが、なにかしら意味はあるものと考えられており、先例等ご存知の方がおられたらご指正、ご教示賜りたく思う次第である。

さいごに

紙面の関係もあり、資料から６点を選んだが、基本的に書跡において中国古典の引用がなされる場合は「おめでたい言葉（吉語）」「漢詩」「教訓（修身）」になる傾向にある。

今回の記事は内容もまだまだ考察すべき点もあり拙い内容ではあるが、どこかの博物館で書跡を観覧された折、それはその揮毫者のオリジナルなのか、もし引用ならばその引用はどこからのものか、作者はどのような思いでこれを揮毫したのか等、観覧する際の視点や楽しみが多くなるきっかけになれば甚だ幸いである。

注

※1　『太平廣記』卷十九神仙十九

※2　郭子儀については『舊唐書』卷百二十 列傳第七十 『新唐書』卷百三十七 列傳第六十二　に伝記がある

※3　錢起『和王員外雪晴早朝』

紫微晴雪帶恩光、繞仗偏隨鴛鷺行。長信月留寧避曉、宜春花滿不飛香。

獨看積素凝清禁、已覺輕寒讓太陽。題柱盛名兼絶唱、風流誰繼漢田郎。

※4　王昌齡『武陵田太守席送司馬盧谿』

諸侯分楚郡、飲餞五谿春。**山水清暉遠**、俱憐一逐臣。

徐凝『送李補闕歸朝』

駟馬歸咸秦（一作城闕），雙鳧出（一作去）海門。還從清切禁，再沐聖明恩。

禮樂中朝貴（一作盛），**文章大雅存**。江湖多放（一作旅）逸，獻替欲誰論。

※5　王昌齡『靜法師東齋』

築室（一作山）在人境，遂得真隱情。春盡草木變，雨來池館清。

琴書全雅道，視聽已無生。閉戶脫三界，白雲自虛盈。

楊師道『賦終南山用風字韻應詔』

眷（一作睿）言懷隱逸，輟駕踐幽叢。白雲飛夏雨，碧嶺横（一作冠）春虹。

草綠長楊路，花疏五柞宮。登臨日將晚，**蘭桂起香風。**

※6『首里城公園管理センター普及・啓発年報　第二号』の馬執宏の家譜の翻刻を参照

※7　李邦獻とその著書『省心雜言』については『大谷學報』第八十一巻第四号に緒方賢一氏の「省心雜言と善人」に詳しい。

※8『省心雜言』の該当箇所

「華藻見於外者、謂之文。今古積於中者、謂之學。苟見道不明、用心不正、徒只以文過飾非」

※9『清史稿』卷四百九十七 列傳二百八十四 孝義一　に伝記あり